第11課　イエスは「わたしに従いなさい」と命じられた

【暗唱聖句】

「しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである」ヨハネ10:5

クリスチャンはイエスキリストだけに従っていくものです。それは当然のことなのですが、他の者に対してはついて行かないだけでなく、逃げ去るのです。ところで、わたしたちは逃げ去っているでしょうか。単に、その場から離れるというよりも、恐ろしくて、必死で逃げ去るというイメージです。小動物が、ちょっとした物音でもぱっと逃げ去るように、一目散に逃げるのです。悪魔のささやきを耳にしたならば、その声を耳に傾けて聞いてはなりません。話す内容を確かめる必要もありません。ただ逃げ去るのです。主のもとに逃げ去るのです。

【今週のテーマ】

【日曜日　羊はその声を知っている】

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」ヨハネ10:16

主は囲い（教会）にまだ入っていない羊がいるとはっきり言われました。この羊を導かれなければなりませんが、幸いなことに彼らは、わたしたちと同様に主も声を聞き分けることができます。主の声は直接不思議な方法で語られることもあるでしょうが、もっと多くはクリスチャンを通して語られることでしょう。彼らは羊飼いの声を聞き分けるので、必ず導かれます。そのために、まず私たち自身がいつも主の声を聞き分けるものでなければなりません。そうしなければ、「盲人の道案内をする盲人」（マタイ15:14）のような結果になってしまうかもしれません。また、ここで注意しなければならないことがあります。それは悪いものも羊を狙っているということです。彼らの特徴は「羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る」（ヨハネ10:1）ことです。そのような者はみな、盗人であり、強盗、つまり神ではなく悪魔から来ています。

では、門を通らないでやってくるとはどういうことでしょうか。イエスは「わたしは門である」（ヨハネ10:9）と言われました。そこから言えるのは、イエスを通って来ない、つまりイエスを語らない、イエスの教えとは違うことを教える、そのようなものたちのことを言うのでしょう。

【月曜日　私たちは探さなければならない】

「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」ルカ19:10

「そして、神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わすにあたり」ルカ9:2

「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」黙示録14:6、7

求道者のほうから教会を訪ねてくることが時々ありますが、教会で誰かが来るのを待っていても、あるいは誰かが来るのを一生懸命祈っていたとしても、もしそれだけで終わるのなら、それはイエスがとられた方法ではないということを認める必要があります。イエスご自身も失われたものを探し出して救うために来られたと言われました。100匹の羊飼いのたとえでは、主は99匹を残してでも1匹のために探しに出かけた光景が描かれています。そして、弟子たちをも遣わすと言われました。また黙示録では天使があらゆる国民に告げ知らせるメッセージを携えて空高く飛んでいる姿が描かれています。部屋に閉じこもってじっと誰かが来るのを待っているのとはまるで違う後継です。

「わたしたちは人々が自分のところにくるまで待っていてはならない。わたしたちは人々がいるところへ出て行って、彼らを探し求めねばならない。こちらからもっていかなければ、福音に接することのできない人々がおびただしくいるのである」希望への光P1274

キリスト教国では他宗派への伝道となりますが、日本は全く価値観の違う他宗教や無宗教の人々のもとへ出ていかなければなりません。本当にキリストの方法ぬきには成功はありません。

【火曜日　懸け橋】

わたしたちは、神様を知らない人たちにとって、神様への架け橋とならなければなりません。ルカ19章のザアカイの物語を書かれていますが、群衆はこの罪人と呼ばれていた取税人の頭をキリストのもとに連れてくる懸け橋とならないばかりか、キリストとの間に懸け橋に誰もなろうとはせず、むしろ、それを妨げようとさえしました。ザアカイが幸いだったのは、自らの意志でキリストに会いたいと強く望んでいたことです。そのような者のそばに、主は近づいてこられるので、懸け橋がなくても直接お会いすることができました。しかし、多くの場合、誰かが懸け橋にならないと、主のもとに行くことができません。この懸け橋をわたった先には、一体何が待っているのかという期待感が大切です。懸け橋の先が光り輝く、愛に満ちた世界となっているのか、それともどこか暗く、喜びのない、裁きの精神に満ちた世界になっているのか、これを決定づけるのは、わたしたちなのです。

【水曜日　命じること】

わたしたちの最終的な目標は、人々をキリストに従うように導くことです。そのきっかけとして、様々な地域への奉仕があるわけですが、しかし、奉仕はできても、キリストに従うように導くことに苦手意識を持っている方も少なくありません。それは牧師のする仕事と思っているかもしれません。確かに、信徒が教会へ羊を連れてきて、牧師がその羊をキリストのもとに導くというのは、役割が明快で、考え方としては間違っていないかもしれません。しかし、すでに土台作りがしっかりと築き上げられていれば、「キリストを信じ、従いましょう」ということはそれほど困難なことではないのです。牧師が話すよりも、個人的な証は威圧感を与えず、キリストを導く大きな力になることも多いのです。

パウロの回心

①迫害者「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」使徒26：14

②召命「あなたを奉仕者、また証人にする」使徒26:16

③宣教「神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました」使徒26:20

パウロはダマスコにクリスチャンたちを捕らえにいく途中で、神様から劇的な召命を受けます。この世的には、神様を伝えるのに最もふさわしくないような人物を神様は選ばれました。そして、彼の人生は神様を伝えるものへと変えられていきました。わたしたちもパウロのような劇的ではないかもしれませんが、回心へと導かれ、この世的には全くふさわしくないと感じるかもしれませんが、それぞれのたまものに応じて証人となるように召されているのです。

【木曜日　探しなさい。そうすれば見つかる】

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」黙示録3:20

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」マタイ7:7

「しかし、言（イエス・キリスト）は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」ヨハネ1:12

イエスは戸口に立って心の戸をたたいておらます。わたしたちに求められているのは、「声を聞く」こと、「心の戸を開けること」です。また「求め、探し、門をたたくこと」です。そして、主を信じ、受け入れたときはじめて神の子となる資格が与えられます。

同様に、この一連のことを、キリストをまだ知らない人たちに対しても導いてあげるようにと召されています。私たちはキリストについて語ることはできますが、最終的にキリストを探し、求め、信じるのは本人です。わたしたちは聖霊の導きのうちに、その手助けをするにすぎません。